

大野城市の文化財

第 42 集

日本の郵便制度と雑餉隈郵便局



2010

大野城市教育委員会

序

この度刊行しました『大野城市の文化財』第42集は、平成20年に開催しました「日本の郵便制度と雑餉隈郵便局展」が好評であったことから同内容を取り上げました。平成20年は現在の博多南郵便局開局130周年という記念の年であったことから企画展を実施したのですが、多くの方々に来室いただきました。また、平成21年は「郵便制度の父」と呼ばれた前島密の没後90周年という記念の年でもあり、このような年に本書を刊行できることを大変嬉しく思っています。

本書の中に使用している写真のほとんどが大野城市内在住の郷土史家である赤司岩雄氏より提供されたものです。その中には今から130年前の雑餉隈郵便局の任命辞令書や給与辞令書など、非常に資料的価値の高いものが多く含まれており、赤司氏の協力なしには実現しなかった企画であったと感謝しております。

今回この冊子をご覧いただいた方々が、日本の郵便制度への理解を深め、現在は閑静な住宅地となっている雑餉隈町が、当時は交通の要衝として非常に栄えていたため公共機関である郵便局が設置されたということを理解していただければと思います。

最後になりましたが、『大野城市の文化財』第42集の監修をいただきました赤司岩雄氏に心からお礼申し上げます。

平成22年3月31日

大野城市教育委員会
教育長 古賀 宮太

目 次

雑餉隈郵便局（博多南郵便局の創業）の歴史	
筑前雑餉隈郵便局の開局	1
歴代局舎の移転とその位置	2
歴代局舎の見取り図	6
局名の変遷	7
歴代局長の引継ぎ	8
大野城市内の特定郵便局	9
資料編	11
日本の郵便制度と雑餉隈郵便局略年表	18
コラム	19

雑餉隈郵便局（博多南郵便局の創業）の歴史

【筑前雑餉隈郵便局の開局】

日本近代郵便制度が東京－京都－大阪間で始まったのは、明治4年（1871）3月1日である。

同年12月に筑前国（福岡県）に設置された郵便取扱所（郵便局）は10カ所であり、明治7年には17カ所が増設されているが、現大野城市周辺には福岡、三宅、二日市、山家局があるのみで、特に三宅と二日市間は距離が遠く、せっかく開設された郵便制度も利用するには大変不便であったので、三宅郵便局と二日市郵便局の間にある現大野城市、春日市、福岡市博多区地域の人達は、郵便局の新設について駅逓局（総務省）に陳情をつづけた。その結果、江戸時代の博多宿と二日市宿の中間の「間の宿」として繁栄していた雑餉隈町は、この地区の中心地であり、政府が意図した民間資本を利用する郵便事業に適任の資産家で、土着の半農半商の地主的知識人も多く、地元住民の強い要望がありこの地に決定され、「筑前国雑餉郵便局」として開局したのは、明治11年（1878）2月23日のことである。

平成20年（2008）はちょうど開業130周年にあたる。

【歴代局舎の移転とその位置】

郵便制度発足以来、郵便局舎は郵便取扱人（郵便局長）の自宅を無償で提供しなければならなかった。

この局舎用地建物提供義務がなくなり、有償保障となったのは昭和23年（1948）2月19日のことである。

雑餉隈郵便局舎の位置は取り扱いする家（局長）の交代、局舎の移転などにより次のとおり変更している。

（五等～三等郵便局時代）

城戸家時代 明治11年（1878）2月23日から明治18年（1885）2月17日まで（5頁地図①）
那珂郡井相田村小字雑餉隈730（現大野城市雑餉隈町3丁目2-10）



写真1
創業時の局舎として使用した
城戸家 ▶

河波家時代 明治18年（1885）2月17日から明治36年（1903）9月30日まで（地図②）
御笠郡山田村小字宝松431（現大野城市山田4丁目3-20）



写真2
陸橋の手前の場所にあった当時
の局舎は取壊されて、その跡地
は中古車展示場になっている。 ▶

高原家時代

仮局舎 明治36年（1903）9月30日から明治38年（1905）まで（地図③）

筑紫郡大野村大字井相田小字雑餉隈786（現大野城市雑餉隈3丁目3 - 9）



写真3
新局舎を新築するまでの間、▶
江戸時代の旅籠「いろはや」
の一部を借りて営業する。

新 築 明治38年（1905）から昭和7年（1932）まで（地図④）

筑紫郡大野村大字筒井小字雑賞隈788（現大野城市筒井1丁目1 - 1）



写真4
局舎前の道路は日田街道で、▶
昭和7年に拡幅舗装して国道
3号線となる。現在は県道
112号線

仮局舎 昭和7年（1932）初めから同年9月16日まで（地図⑤）

筑紫郡那珂村麦野（現福岡市博多区竹丘町1丁目）

移転改築 昭和7年（1932）9月16日から昭和19年（1944）9月30日まで（地図⑥）

筑紫郡那珂村麦野（現福岡市博多区竹丘町1丁目5）



写真5
筒井の局舎前の道路拡幅のため立退くことになり、国鉄雑▶
餉隈駅（現JR南福岡駅）近くに
移転改築した。

(普通郵便局に昇格後)

民間人が局長を勤める特定郵便局（旧三等郵便局）であった雑餉隈郵便局は昭和19年10月1日から普通郵便局に昇格したため、通信事務官が局長になる官営の郵便局になった。

高原家の局舎借用時代（地図⑥）

昭和19年（1944）10月1日から昭和28年（1953）3月10日まで

筑紫郡那珂町麦野（現福岡市博多区竹丘町1丁目5）

昭和24年（1949）6月1日から法律により郵便局と電報電話局に分離された。

郵便局のみ新築移転（地図⑦）

昭和28年（1953）3月10日から昭和44年（1969）まで

筑紫郡那珂町麦野495（現福岡市博多区寿町3丁目25）



▲写真6 郵便局分離新築移転記念写真



▲写真7 郵便事務の増と電話局の局舎による増築後の写真

電報電話局も新築移転（地図⑦）

昭和30年（1955）3月20日から現在まで

筑紫郡那珂町麦野495の郵便局の北隣



写真8
郵便局と分離後も高原家の借家 ▶
家にいたが、先に新築移転していた郵便局の隣に局舎を新築して移転した。

郵便局新築移転（地図⑧）

昭和44年（1969）3月16日から現在まで

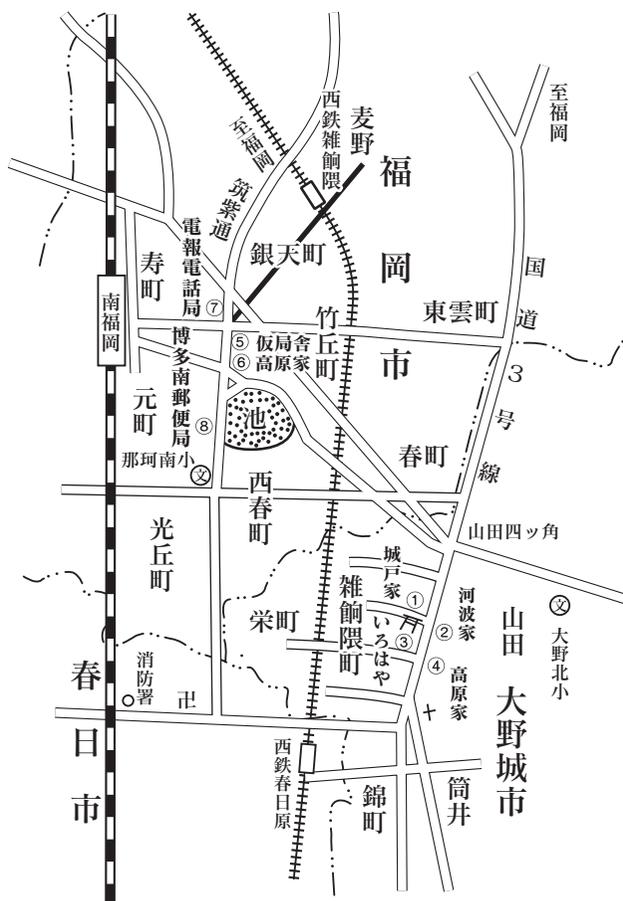
福岡市博多区元町2丁目16



▲写真9 昭和44年新築移転し、47年から博多南郵便局となる。



▲写真10 3階建てに増改築後の現在の博多南郵便局



局舎所在地の変遷地図

【局名の変遷】

郵便局

- ① 筑前国雑餉郵便局（五等郵便局） 明治11年（1878）2月23日
- ② 同（四等郵便局） 明治13年（1880）7月6日
- ③ 筑前国雑餉限郵便局（三等郵便局） 明治19年（1886）3月26日
- ④ 雑餉限郵便電信局 明治30年（1897）3月16日
- ⑤ 雑餉限郵便局（三等郵便局） 明治36年（1903）4月1日
- ⑥ 福岡南郵便局 昭和33年（1958）5月16日
- ⑦ 博多南郵便局 昭和47年（1972）4月1日
- ⑧ 民営化により 平成19年（2007）10月1日

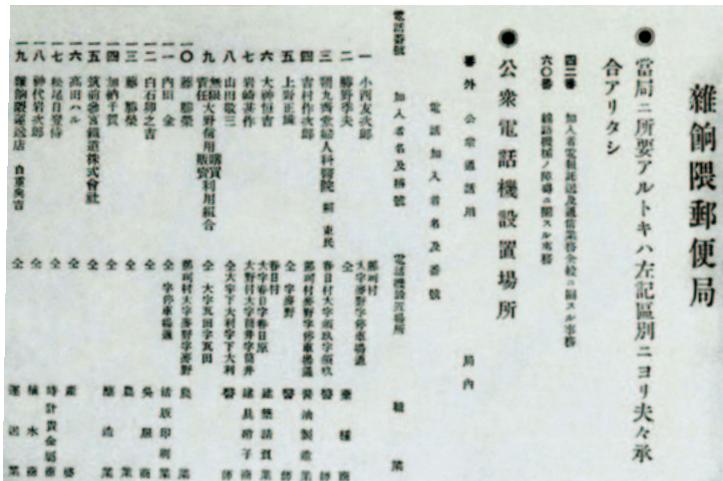
郵便局株式会社 博多南郵便局 窓口業務 福岡市博多区元町2丁目16番地

郵便事業株式会社 博多南支店 配達業務 同上

郵便事業株式会社 新福岡支店 収集業務 福岡市東区蒲田

電報電話局

- ① 雑餉限郵便電信局 明治30年（1897）3月16日
- ② 雑餉限電報電話局 昭和24年（1949）6月1日
- ③ N T T 電電公社 昭和61年（1986） 雑餉限局、二日市局、筑紫丘局を合併
- ④ N T T 西日本〔電信電話株式会社〕



▲写真11 昭和初期の雑餉限郵便局管内の電話番号帳
(逓信博物館提供・赤司岩雄氏蔵)

【歴代局長の引継ぎ】

初代 城戸半七 明治11年（1878）2月23日～明治17年7月1日

二代 城戸半次郎 明治17年（1884）7月1日～明治18年2月17日

三代 河波宗五郎（写真12）

明治18年（1885）2月17日～明治33年3月28日

写真12▶



四代 河波荒次郎（写真13）

明治33年（1900）3月28日～明治36年9月30日

写真13▶



五代 高原謙造

明治36年（1903）9月30日～大正14年7月24日

六代 高原虎太郎（写真14）

大正14年（1925）7月24日～昭和6年4月7日

写真14▶



七代 高原勝栄（写真15）

昭和6年（1931）4月7日～

昭和19年（1944）9月30日

写真15▶



昭和16年（1941）2月1日の「通信官署官制の改正」により、1～2等郵便局は普通郵便局に、3等郵便局は特定郵便局と改められた。

雑餉隈郵便局は昭和19年（1944）10月1日付けて特定郵便局から普通郵便局に昇格した。このため通信官署官制第十六条「普通郵便局長ハ通信事務官又ハ通信書記ヲ以テ之ニ充ツ……」の規定により、久留米郵便局郵便課長福井義重が第8代局長として赴任してきた。

以下の局長は省略する。

【大野城市内の特定郵便局】

特定局は受持区域が狭く小規模で、集配業務は行わないが、基本的な業務の内容は普通局と変わりはない。

大野城市域を受持区とする特定郵便局は次の8局がある。

写真16▶

① 筑前大野郵便局

昭和16年7月1日開局

瓦田小字古賀763 - 3〔現瓦田3丁目11 - 15〕

受持区 瓦田 白木原 曙町 瑞穂町



② 大野城下大和郵便局

昭和38年3月28日開局

下大和231 - 6〔現下大和1丁目13 - 21〕

受持区 上大和 下大和 下大和団地
東大和 中央

写真17▶



③ 大野山田郵便局

昭和42年6月1日開局

山田498 - 3〔現山田2丁目15 - 20〕

受持区 山田 仲畑 筒井 雑餉隈
御笠川

写真18▶



④ 東大野郵便局

昭和44年3月17日開局

瓦田467〔現大城1丁目20 - 36〕

受持区 乙金台 大城 大池
御笠川 川久保

写真19▶



⑤ 大野城南ヶ丘郵便局 写真20▶

昭和49年4月6日開局

南ヶ丘7丁目109

〔現南ヶ丘3丁目2 - 27〕

受持区 南ヶ丘 平野台 つつじヶ丘

紫台 旭ヶ丘 横峰 緑ヶ丘

宮野台



⑥ 大野城牛頸郵便局 写真21▶

昭和54年9月21日開局

牛頸小字下ノ原1674 - 4

〔現若草1丁目1 - 5〕

受持区 牛頸 若草 畑ヶ坂 平野台

月の浦 春日市惣利 平田台

塚原台



⑦ 春日原郵便局 写真22▶

昭和19年5月18日開局

春日村春日原

〔現春日市春日原北町2丁目7 - 3〕

受持区 春日市の一部 雑餉隈町 栄町

錦町 筒井



⑧ 中簡易郵便局

昭和55年3月1日開局

中小字平塚53 - 12 〔現中3丁目6 - 35〕

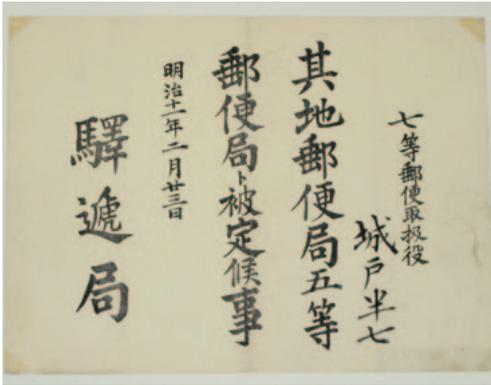
受持区 中 乙金 乙金東 川久保

写真23▶

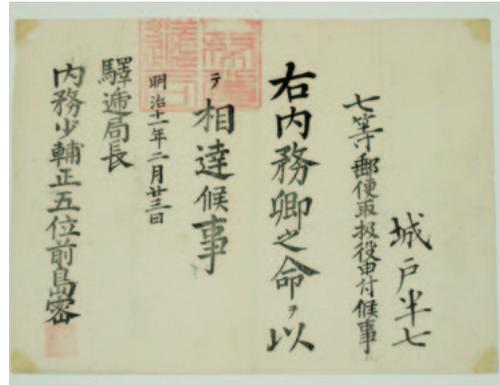


資料編

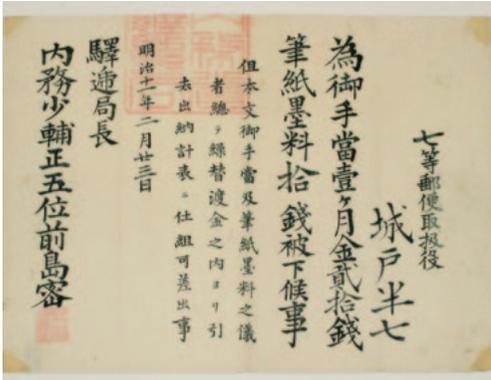
辞令書（資料は全て赤司岩雄氏蔵）



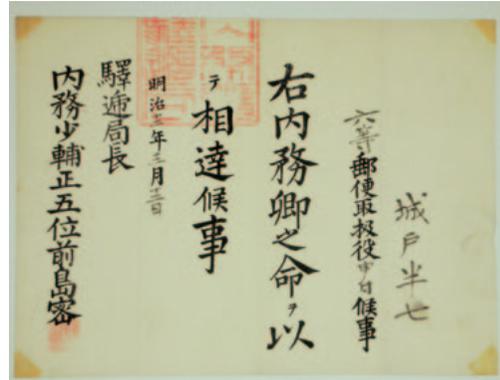
▲写真24 五等郵便局指定書
明治11年2月23日 初代 城戸半七



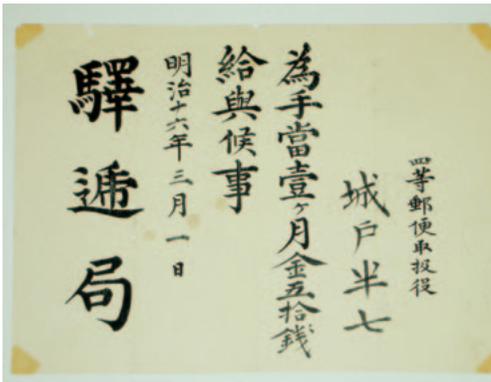
▲写真25 七等郵便取扱役任命辞令
明治11年2月23日 初代 城戸半七



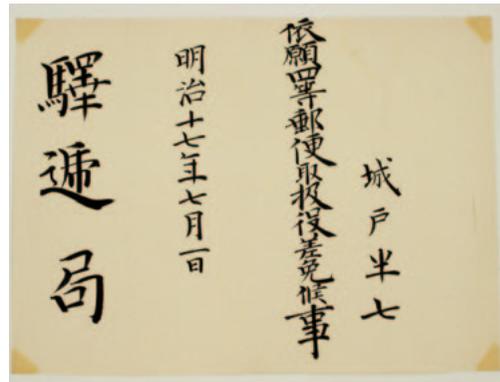
▲写真26 初任給給与辞令
明治11年2月23日 初代 城戸半七



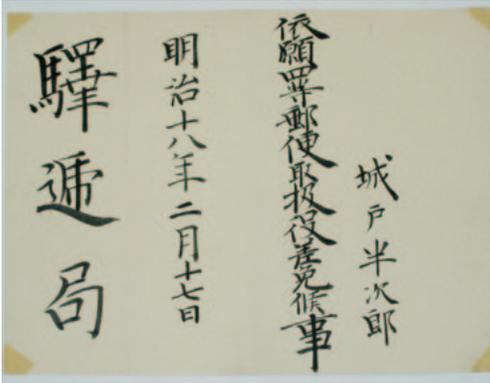
▲写真27 六等郵便取扱役昇任辞令
明治12年3月12日 初代 城戸半七



▲写真28 四等郵便取扱役昇給辞令
明治16年3月1日 初代 城戸半七



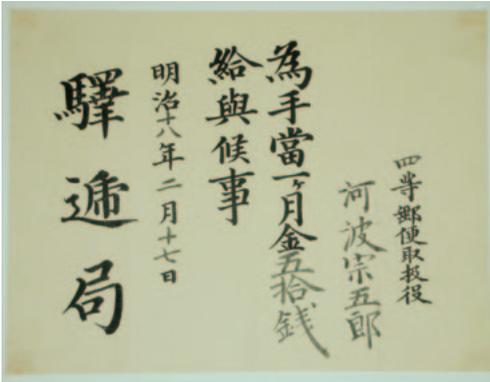
▲写真29 四等郵便取扱役退任辞令
明治17年7月1日 初代 城戸半七



▲写真30 四等郵便取扱役退任辞令
明治18年2月17日 2代 城戸 半次郎



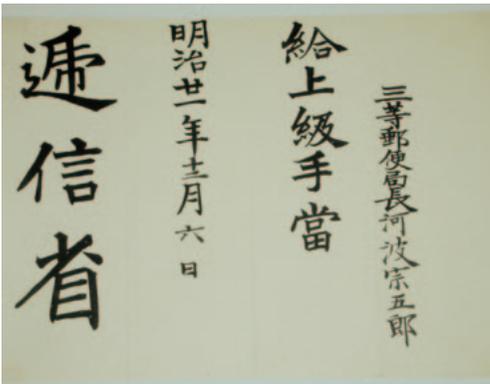
▲写真31 四等郵便取扱役任命辞令
明治18年2月17日 3代 河波 宗五郎



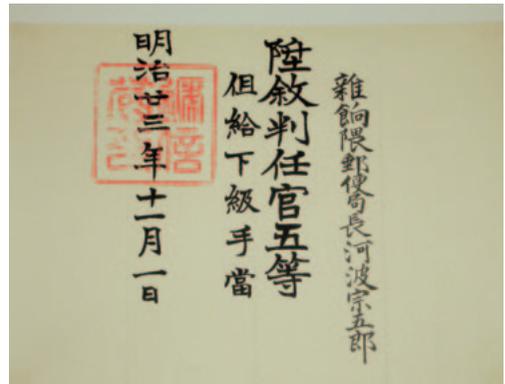
▲写真32 四等郵便取扱役給与辞令
明治18年2月17日 3代 河波 宗五郎



▲写真33 判任官十等叙任並びに給与辞令
明治19年5月25日 3代 河波 宗五郎



▲写真34 三等郵便局長昇給辞令
明治21年12月6日 3代 河波 宗五郎



▲写真35 判任官五等叙任並びに給与辞令
明治23年11月1日 3代 河波 宗五郎



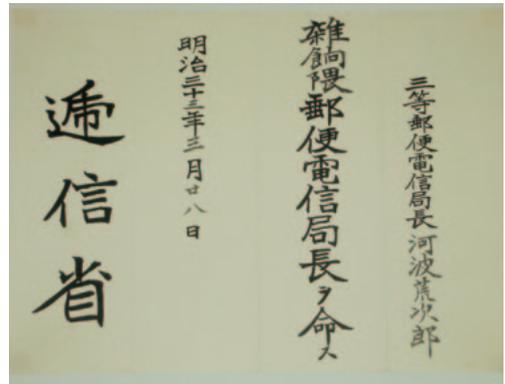
▲写真36 雜餉隈郵便電信局長任命辞令
明治30年3月16日 3代 河波 宗五郎



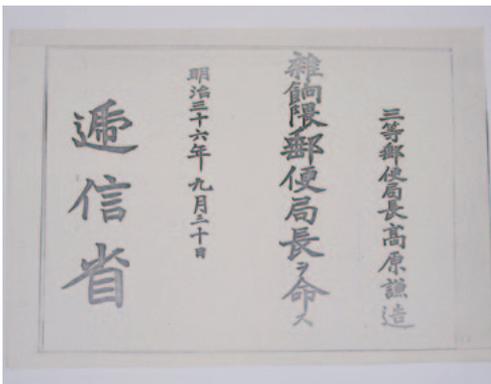
▲写真37 雜餉隈郵便局給与辞令
明治31年9月10日 3代 河波 宗五郎



▲写真38 三等郵便電信局長任命辞令
明治33年3月28日 4代 河波 荒次郎

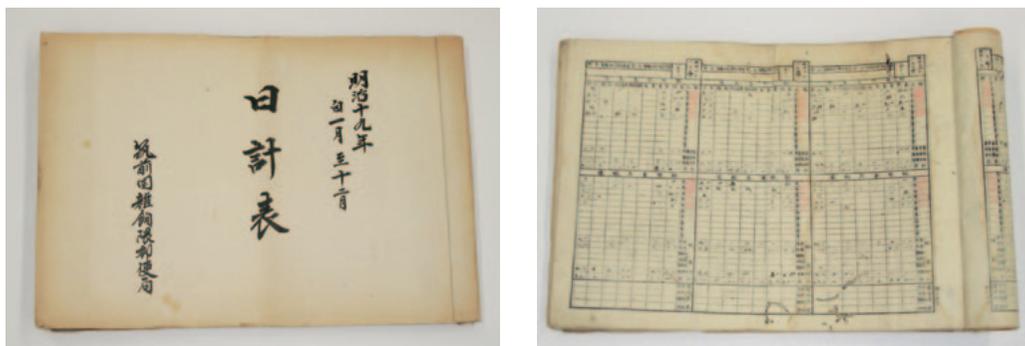


▲写真39 雜餉隈郵便電信局長任命辞令
明治33年3月28日 4代 河波 荒次郎



▲写真40 雜餉隈郵便局長任命辞令
明治36年9月30日 5代 高原 謙造

その他資料（資料は全て赤司岩雄氏蔵）



▲写真41 郵便到着・集信・配達・差立日計表 明治19年1月～12月

※毎日の到着数と配達数、発送数を記録した。数字は漢数字で右から左に読む。墨書きであるので、訂正は上から紙を貼り付けて書き直した。



▲写真42 郵便物配達時間帳 明治16年・28年

※管内を5地区に分け、それぞれの発送時間と帰着時間が正確に記録された。



▲写真43 集信第一区証印帳 明治35年7月

※ポストから郵便を集めるときに、ポストの中に備え付けられている印鑑を捺印して確認した。



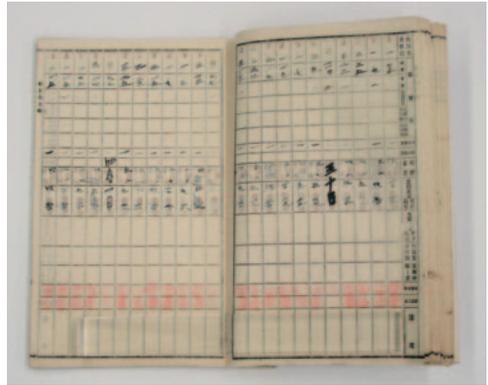
▲写真44 貯金受払高及度数等取調表 明治19年～明治22年



▲写真45 書留郵便継越原簿〔片縄局との分〕 明治22、23年



▲写真46 書留郵便物引受帳 明治24年



▲写真47 郵便差立帳 明治26年



▲写真48 郵便到着帳 明治26年



▲写真49 郵便局業務概要 (博多南郵便局) 昭和49年度



▲写真50 電報電話局業務概要 (雜餉限電報電話局) 昭和48・49・52年度



▲写真51 筑前雑餉限郵便電信局封筒



▲写真52 博多南郵便局開局100年記念タオルとスタンプ

日本の郵便制度と雑餉隈郵便局略年表

年 月 日	雑餉隈郵便局（現博多南郵便局）	日本の近代郵便通信制度の歩み
慶応 4. 4. 21		政体組織法に基づき駅通司を設置する
明治 2. 8. 9		横浜で電信の官用通信試験に成功する
2. 12. 25		横浜－東京間の公衆電報取扱いを開始する
3. 6. 2		前島密が郵便創業の建議書を提出する
4. 1. 24		太政官から郵便創業の布告を発する
4. 3. 1		東京・京都・大阪間に郵便を創業する
4. 7. 15		東京－横浜間の郵便を開業する
4. 12. 5		東京－長崎間の郵便を開業する
		筑前六宿と福岡に郵便取扱所を設置する
5. 7. 1		全国に郵便制度を実施する
		筑前国の郵便取扱所は10ヶ所となる
6. 2. 14		電信が東京－長崎間に布設完了する
6. 10. 1		小倉・福岡・佐賀に電信局を開局する
7. 1. 1		郵便取扱所をすべて郵便役所と改称する
7. 12. 20		筑前国に郵便役所17ヶ所を増設する
8. 1. 1		郵便役所を郵便局と改称する（一等から五等）
9. 3. 10		グラハム・ベルが電話を発明する
10. 11. 13		電話機を日本に輸入する
10. 12. 21		日本最初の直通試験通話に成功する
11. 2. 23	筑前国雑餉郵便局が開局する（五等局） 初代郵便取扱役に城戸半七が任命される 局舎是那珂郡井相田村字雑餉隈730番地	
16. 3. 1		全国に52ヶ所の駅通出張所を設ける
17. 7. 1	2代郵便取扱役に城戸半次郎が任命される	
18. 2. 17	3代郵便取扱役に河波宗五郎が任命される 局舎は御笠郡山田村431の河波家に移る	
18. 6. 25	郵便貯金業務の取扱いを開始する	
19. 3. 26	局名を雑餉隈郵便局と改称する 三等郵便局に格付けされる	郵便局の等級格付を一等～三等に改正する
19. 5. 25		郵便取扱役に郵便局長と改称する
22. 1. 1		東京－熱海間の公衆電話が開通する
25. 6. 1	郵便小為替事務の取扱いを開始する	
30. 3. 16	電信業務の取扱いを開始する 局名を雑餉隈郵便電信局と改称する	
32. 5. 1		福岡電話局が開局する
33. 3. 28	4代郵便電信局長に河波荒次郎が任命される	
36. 4. 1	局名を雑餉隈郵便局と改称する	
36. 9. 30	5代郵便局長に高原謙造が任命される 局舎は大野村大字井相田雑餉隈786の生田家を 借りて仮局舎とする	
38	局舎を大野村大字筒井字雑賞隈788に新築移転 する	
大正 11. 12. 6	電話加入申込みの受付を開始する	
14. 7. 24	6代郵便局長に高原虎太郎が任命される	
15. 2. 12	局管内の電話が開通する	
昭和 6. 4. 7	7代郵便局長に高原勝栄が任命される	
7. 6. 19	局舎を那珂村麦野の仮局舎に移転する	
7. 9. 16	局舎が那珂村麦野に新築落成し移転する	
16. 2. 1	特定郵便局に格付けされる	一～二等郵便局を普通郵便局に、三等郵便局を 特定郵便局と改称する
19. 10. 1	特定郵便局から普通郵便局に昇格する 高原勝栄は宇美特定郵便局長に転任する	
	8代郵便局長として郵政事務官福井義重が任命 される（以降は郵政事務官が局長となる）	
24. 6. 1	雑餉隈郵便局と雑餉隈電報電信局に分離する	
28. 3. 10	郵便局のみ局舎を那珂町麦野495に新築し移転 する	
30. 3. 20	電報電話局も郵便局の隣に新築し移転する	
33. 5. 16	局舎所在地の那珂町が福岡市と合併したため局 名を福岡南郵便局と改称する	
44. 3. 16	福岡南郵便局は局舎を博多区元町2丁目16に新 築し移転する	
47. 4. 1	区政施行により博多区となり局名を博多南郵便 局と改称する	

コラム

前島密とは…

前島密は天保6年（1835）越後国（新潟県）に生まれ、明治期に日本の近代郵便制度を創設し、大正8年（1919）に没しています。現在の1円切手の肖像画になっている人物ですが、近代郵便制度を確立させたことから「郵便制度の父」と呼ばれています。密は外国で行われていた郵便制度をつぶさに視察し、日本の国情にあった制度として導入しました。現在使用されている「郵便」や「切手」「葉書」という名称を郵便制度に用いたのも前島密です。

明治3年（1870）5月に駅通司の駅通権正に命じられた前島は、通信や交通の問題があるなかで、まず郵便制度に着手します。それまで、飛脚によって運ばれていた信書などは、重さや距離によって料金もまちまちで、相手に届くまでに日数がかかる上に金額も膨大でした。また、飛脚とはいえ僻地へは配達しないこともあり、日本全国で同じ利益を享受できないという現状がありました。

これらいろいろの問題点を検討整理して、ほぼ構想が出来上がった同年6月に鉄道建設資金借入れ交渉のためイギリスへ出張を命ぜられたので、前島の後を引き継いだ杉浦譲が駅通頭となり、前島が準備計画していたとおりに郵便創業の作業を進め、明治4年（1871）3月1日（新暦4月20日）に郵便事業を創業しました。

このようにわが国の郵便制度は前島密の構想と、杉浦譲の推進力によって創始されたのです。



▲写真54 前島密 1円切手



▲写真53 前島密銅像

明治4年8月にイギリスから帰国した前島密は、自ら望んで駅通頭となり、郵便制度を整備充実し、全国均一料金や切手、消印など、現在の私たちにとっては当たり前となっている形式を欧米から学び実行に移していきました。

コラム

日本橋とは…



▲写真55 日本橋郵便局 最初の郵便制度は東京 - 京都 - 大阪間で開設されましたが、そのそれぞれの都市には郵便役所が設けられていました。東京郵便役所を原局として、京都、大阪を分局としていました。その後、横浜に特別に郵便役所が設置され、東京から直通便が開設されました。江戸時代までの個人契約で信



▲写真57 郵便箱
(逓信博物館蔵)

書を配達してもらう飛脚と比べると、新しいシステムは切手を貼って郵便ポストに投函すれば、毎日回収、戸別配達という非常に利便性の高いものでした。

最初に設置された郵便ポストは「書状集め箱」と呼ばれるもので、日本橋の郵便役所前のほか12カ所に設置されました。江戸時代の目安箱を連想させる木製の箱で、上に屋根を付けたデザインでした。

その後、開業2年目の明治5年に郵便制度が全国実施されると共に、郵便ポストも全国統一仕様が取られるようになりました。明治5年にお目見えしたポストは黒い木製角柱形で正面には「郵便箱」という文字が、また、投函口には差出口という文字が白漆塗りで書かれていました。明治6年2月の新聞報道で、地方の篤志家が初めて東京で黒塗りの郵便箱を見て、「郵便」の「郵」の字の偏が「垂」という字であるため「タレベン」と読み間違え、その頃流行の公衆便所と間違えてその中に小便をし、この差出口は小さいうえに高すぎるので、普通の日本人には適さないといふやいたという笑い話が有名です。

福岡近郊でこの黒塗りのポストが赤色丸型ポストに変わったのは、明治の末頃か大正の初め頃であったと、元雑餉限郵便局員であり春日原郵便局初代局長の古賀貞右衛門は話されていました。

日本橋は日本の郵便発祥の地です。明治3年東京郵便所は中央の郵便役所として日本橋四日市の旧幕時代の魚納屋役所の土蔵を大蔵省より受け取り、改修して使用されました。その時、丸の内にあった駅通司もここに移転して業務が開始されました。現在、郵便制度の確立した明治4年3月1日(旧暦)を記念して、新暦4月20日が逓信記念日となっています。



▲写真56 書状集め箱
(逓信博物館蔵)

コラム

支給された八角型の時計…

郵便事業では通送時間厳守のため、到着・差立ての時間を正確に測定し記録するには時計が必要でした。島崎藤村の『夜明け前』には「店座敷はさしあたり郵便事務を取扱うところに宛てられていて、その壁の上には新たに八角型の柱時計がかかり、かちかちという音がし出した。」とあります。当時としては時計は貴重品であり、民間人で時計を所有する人は極めてまれで、公用といえどもその取得は非常に困難でした。城戸半七氏の時計交付の要求に対する駅逓局からの回答文書からもそのことがうかがえます。



▲写真58 八角時計
(逓信博物館蔵)



▲写真59 時計下げ渡し難き旨の回答書
(赤司岩雄氏蔵)

「規十三第六一六〇号

筑前国雑餉郵便局

時計下渡方其官庁ヲ経申立之趣ハ福岡局
差立之脚夫山家局ノ往復トモ立寄次第郵
便物受渡方取扱候迄ニ付難下渡義与可心
得此旨相達候事

十三年九月一日

駅 逓 局 』

コラム

郵便局から郵便局までの距離…

駅逡寮は明治5年の7月には郵便線路を北海道の北半分を除く国内に延ばしていきました。九州では長崎までネットワークが繋がりました。創業当時、「郵便役所」は東京の原局が1つ、京都・大阪に分局が一つずつ、それに街道筋にある「郵便取扱所」が62あるだけの、わずか65ヵ所から始まりましたが、明治5年の前半には千ヵ所を超え、明治6年には3千ヵ所を超えていました。

『福岡県史稿・陸運之部駅逡』の記録によれば郵便局（明治8年1月から郵便役所を郵便局と改称。）相互の配置距離は、平均1里34町46間（約7.7km）です。その中で福岡郵便局から、三宅郵便局（現大橋郵便局）までは1里25町15間（約6.6km）、三宅郵便局から二日市郵便局（現筑紫野郵便局）までは2里25町29間（約10.6km）、二日市郵便局から郵便本線の山家郵便局までは1里26町47間（約6.8km）となっています。

このように、三宅郵便局と二日市郵便局との間は平均距離よりも遠いため、中間町村に住む人々は5km以上も歩かなければ郵便局がないという状況に大変不便を感じていました。このため郵便局新設の要望が次第に高くなってきました。新局の設置にあたっては

- 1 現郵便継越路線にあること。
- 2 当該地方の中心的で便利な場所であること。
- 3 既設郵便局との距離を考慮すること。
- 4 人物見識ともに優れ、相当の資産を持ち、更に筆算のできる取扱人が得られること。
- 5 局舎の提供が可能なこと。

等の条件が揃っていることが必要でした。そして、これらの条件を満たすことのできる場所として、筑前国那珂郡井相田村字雑餉隈に白羽の矢が立てられました。

雑餉隈は博多へ2里、二日市へ2里と言われ、江戸時代から博多宿と二日市宿の中間の宿として栄えていました。また、太宰府往還に面していて、茶店や旅籠屋が軒を並べ、近郊近在農村の中心でもありました。土着の半農半商の地主的知識人も多く、郵便局を設置するには最適な場所として決定されました。

こうして明治11年2月23日に雑餉隈郵便局は五等郵便局として開局しました。



▲写真60 郵便逡送用力（逡信博物館蔵）

コラム

官に仕えるという意識…

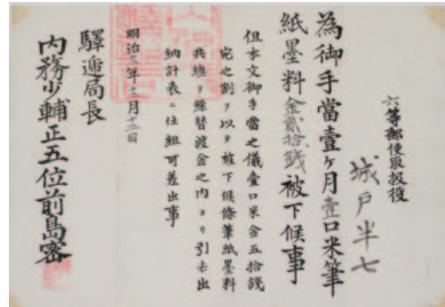
前島密は郵便取扱所を整備し、また、陸運会社を設立し、郵便制度の普及に努めてきましたが、組織をさらに拡大、充実させるためには民間人の力が必要と感じました。民間の人々に郵便業務を委託し、その収入に応じて報酬を支払うというものでした。

明治初期は江戸時代からの封建制度が色濃く残る時代であったため、官吏に準じる仕事に就けるといっただけで、地方の資産家たちは喜んで力を貸しました。また、辞令は前島密の名前で出され、一般にはお墨付きと呼ばれました。

城戸半七の初任給の辞令によれば、月手当20銭に筆紙墨料10銭を加えたものが給されていました。当時のほとんどの郵便取扱役は七等で、その等級別手当額は30銭から50銭、というわずかな手当てに過ぎませんでした。しかし、士族・平民という身分制度の残る明治初期では準官吏の格式を得た郵便取扱役としては、手当てを金銭でもらうことをいやしみ、昔の武士と同じように米で給与されることを望んだので、禄に代わる「口米」という名称を使って、逓信局はその要望に応えました。

この時駅逓寮の任命に応じた「郵便取扱所」は、明治7年に「郵便役所」と改称し、翌8年には「郵便局」と改称し等級格付けを一等～五等にしました。更に19年には郵便局の等級格付け一等～三等に変更しました。このため雑餉隈郵便局は「三等郵便局」になりました。

明治5年の全国における直接の寮官は85名しかいませんでした。これだけの人数で全ての郵便事業を動かしていたのでした。



▲写真61 御手当壹口米辞令
(赤岩雄氏蔵)
壹口米は金50銭である。

コラム

郵便配達人と配達速度・・・

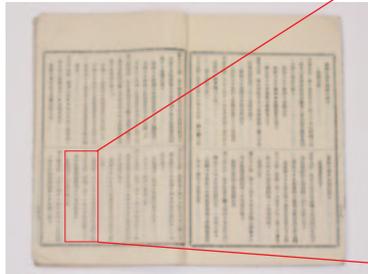
郵便取扱所相互の通送時間は大変厳密に分単位で決められていました。福岡県勸業月報の中に記載されている「福岡県管内郵便往復方法」によれば、福岡県内の郵便路線は一等速度線二時間五里行、二等速度線二時間四里行、三等速度線二時間三里行の三段階に区分されています。

雑餉限郵便局は三等速度線に属していて、

○三等速度線 二時間三里行

第三拾八条 雑餉ニ於テハ毎日午后四時三宅エ向ケ郵便発遣同所ニテ交換往復ス
里程壹里六町三拾八間三尺 (4.65km)

と記載されています。



去年十一月廿九日
三宅局ヨリ雑餉ニ於テハ毎日午後四時三宅
向ケ郵便發遣同所ニテ交換往復ス
里程壹里六町三拾八間三尺

▲写真62 福岡県勸業月報〔管内郵便往復方法〕明治15年12月刊行（赤司岩雄氏蔵）

明治15年（1882）の筑前国雑餉限郵便局においては、三宅局への一往復の通送と一等速度線からの上り下り各二便あての通送立寄りが行われていました。

当時の郵便脚夫は、三貫目（11.25kg）の郵便行李を担いで、饅頭笠を胸に当てて走ってもこの笠が風圧のために落ちないくらいのスピードで走ることを要求されていました。風雨寒暑にも負けずに走り続けた脚夫たちの苦労は並大抵のものではなかったでしょう。その代わりに定められた時間よりも早く到着した場合には、感謝の辞が与えられるという配慮がなされていました。

この集配業務に初めて自転車を使用したのは明治24年東京木挽町郵便局であったといえます。雑餉限郵便局で郵便配達に自転車を使用するようになったのは、大正時代の中頃であったと六代局長高原虎太郎の長女ウメノさんや当時の局員古賀貞右衛門等が記憶されているだけで、明確な資料はありません。



▲写真63
明治時代の制服
（逓信博物館蔵）

**大野城市の文化財
第42集**

平成22年3月31日

発行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2丁目2番地1号

印刷 山口印刷株式会社
佐賀県伊万里市二里町大里乙3617-5

